

〈江別市の概要〉

地勢

江別市は石狩平野の中央に位置し、全体的に平坦な地形で、総面積は187.57平方キロメートル。鉄道や充実した道路網により道内の主要都市と結ばれているほか、空・海の玄関口である新千歳空港や石狩湾新港にも近く、恵まれた立地条件です。

また、市内には日本三大河川の一つである「石狩川」が流れ、野幌森林公園があるなど、自然環境にも恵まれています。

農業

石狩平野の中央部で、稲作、畑作、酪農、肉用牛、施設園芸など多彩な農業を展開しており、この1次産品から産学官^{※1}と市民が一体となって様々なオリジナルブランドづくりに挑戦しています。

農産物加工品

トマトケチャップや味噌など、農家の方がつくる農産物加工品が、直売所などで販売されています。

石狩川・千歳川・夕張川

江別市は、道内最大の河川である石狩川の下流部において、千歳川、夕張川との合流点でもあり、かつては港が栄え、川とともに生きてきたまちです。

れんが・やきもの

江別市でのれんが生産は、明治24(1891)年に始まったと言われています。れんがの生産は、産業として経済を支えたほか、文化的にも大きな影響を与え、7月に開催される「やきもの市」は、道内有数のイベントとなっています。



大学・研究所

江別市には4大学1短大があり、市民向けの公開講座やセミナーを行なっています。また、産学官連携により、地域の課題解決や活性化にも取り組んでいます。さらに、道立や民間の研究施設が多く、地域ブランドの開発などを地元と連携して取り組んでいます。

野幌森林公園

広葉樹、針葉樹が入り混じり、森林浴や野鳥探索を楽しめます。冬は歩くスキーなどを楽しむこともできます。面積が2,000ヘクタール以上あり、大都市の近郊にある大面積の平地林としては、世界的にも稀で貴重な森林公園です。



【用語解説】

※1 産学官：民間企業と大学・研究機関、行政機関の総称。近年、産学官の連携による共同研究開発や地域産業の技術高度化などが進められています。

〈江別市のあゆみ〉

江別の地名の由来は、アイヌ語の「ユベオツ」（サメのいる川）や「イ・プツ」（大事な場所への入口）など諸説あります。

明治4（1871）年、宮城県涌谷領から21戸76人の農民が、江別の対雁（ツイシカリ）に入地し、明治11（1878）年には屯田兵10戸56人が移住してきました。同年、明治政府による開拓使府令が布達され江別村が誕生、その後、各地から屯田兵が入地し、計画的な開拓がすすめられました。

大正5（1916）年に町制施行、昭和29（1954）年には市制が施行され江別市が誕生しました。

昭和30（1955）年代後期から40（1965）年代にかけて、札幌市への人口集中の影響を受け、隣接する江別市でも人口が急増しました。また、文京台地区の大学、その他教育・研究施設の立地、第一工業団地の整備などにより道央圏の中核都市となりました。

平成3（1991）年には、人口10万人を達成し、平成16（2004）年には市制施行50周年を迎えました。

〈江別市の気象〉

平成14（2002）年から平成23（2011）年までの10年間の江別市の平均気温は、7.2℃で、最高の極は、昭和51（1976）年、平成18（2006）年、平成19（2007）年に34.5℃、最低の極は、昭和52（1977）年にマイナス27.7℃が記録されています。平均気温からみると北海道でも温暖な地域であり、北海道の気候の区分では日本海側気候^{※1}に属し、市内の各地区によりやや差があります。

地勢の関係から四季を通じて風が強く、特に4月から5月頃には南南東の強風が特徴的です。

降水量は、平成15（2003）年から平成24（2012）年までの10年間の平均が、約952mmで、7月～8月に集中しやすい傾向があります。

また、11月下旬から翌年4月初旬までが降雪期です。

【用語解説】

※1 日本海側気候：対馬海流の影響を受けて比較的温暖ですが、冬季には風雪が強まり、夏季は気温が高く、晴天が多くなります。